

聴覚特別支援学校高等部における作文指導 ～理由の表現～

田中 優子

日本語には同じことを表現するにも、様々なバリエーションが考えられる。筆者は以前は健聴の学校で勤務していたが、現在の職場に移って生徒を指導していく中で、母語話者の場合は幾通りも広がっていくその選択肢の多様さが聾学校の生徒の場合は欠ける傾向があるのではないかと感じた。聾学校においては、作文指導には初等教育から力を入れている。耳から入る情報の不足を補うために、多くの語彙や文型を意識して覚えられよう、繰り返し指導している。高等部では、大人に近い思考力を備えてきている時期であるだけに、このようなベースがあることを前提とし、生徒達に場に応じた表現の選択をする力を養わせたい。本報告は、そのような考えの下に、多様な表現の可能性を指導していくための、一歩進んだ指導の試みを報告するものである。

【キーワード】 作文指導 高等部 理由の表現 文型

1 はじめに

聴覚に障害のある生徒を対象とした作文に関する研究は様々あり、澤(2000)以下、枚挙に暇がない。指導法についても様々な試みがなされている。作文の指導には小学部、中学部、高等部それぞれに力を入れるが、生徒の成長や思考力の充実度によって、その指導の目的は異なる。高等部の生徒は小学部の児童に比べると複雑な構造の文を理解する力があることは澤(2001)でも検証されている。

また、高校の学習指導要領には次のようにある。

国語を適切に表現し的確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を伸ばし、心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。

(「国語科の目標」より)

また、上記について、学習指導要領解説には次のようにある。

「言語感覚を磨く」とは、言語活動における表現と理解との具体的な場面を通して、目的や場に応じた言葉の適切さや美しさについての感覚

を洗練し、表現の効果について吟味し、適切な判断ができるようにすることである。言語感覚については、小学校では「養う」、中学校では「豊かにする」としていたものを、高等学校では「磨く」としている。

このように、高等部以上である程度思考力が成熟してきている生徒達からはより洗練された多様な表現力を引き出すことが求められていると考える。

2 研究目的

聴覚に障害のある児童・生徒は耳から入ってくる情報が健聴者に比べて不足しているというハンデを補うために、特定の文型を正しく使うことができるようにするのは非常に大切だということは先行研究からも明らかである(佐坂 2014, 谷口 2013)。高等部においては、更に語彙や文型を増やす努力は勿論必要だが、一方でそれまでに学んできたことをベースとして、相手や場面を意識しつつ、既習の語彙や文型をどう使うか、どう広げていくかということ考えた指導が必要と考える。今回は、生徒の表現力の多様性を引き出す試みの一つとして、理由の

表現を授業でどう扱うか考えたい。理由の表現はデータ分析の結果、誤用が多く見られたものの一つである。今回扱うクラス以外でも同様の誤用が見られるが、データの関係で、今回は当該のクラスのみについての報告に止める。

3 研究方法

今回扱うのは、高等部専攻科で2014年4月から一年間の授業の中で行ってきた作文指導の内容の一部である。対象となる生徒の人数は男子3名、女子3名の計6名である。全員が所謂重度難聴の生徒で、口話と手話をコミュニケーション手段としている。個々人で語彙力、表現力、文法力に差はあるが、全体として、授業が成り立たないような力の開きがあるわけではなく、全員で情報を共有しながら授業することに特に支障はない。授業の受講者には月に一回程度、百～二百字の「ミニ作文」を書かせ、全員のミニ作文をワープロで打ち直したものを配布し、フィードバックを全員に対して行うということを継続的に行った。フィードバックの際は、全員の作文を参加者全員で読み、気になる箇所を指摘し合い、どう直すか考えさせる。補足すべきは教員が補足する。一方で生徒の作文を全て文毎にExcelで整理し、誤用は分類した。それらをデータベース化し、分析資料とし、授業にも反映させてきた。なお、生徒達には各自の作文課題とは別に、教員が書いた誤用を含む作文を生徒同士で相談して直し、発表するというグループワークを課した。

表1 作文の誤用例と出現回数

分類	回数
主述関係の誤り	12
助詞の誤り	11
理由の表現の誤り	11
語彙の使い方の誤り	9
活用の誤り	7
話し言葉の使用	7
その他	4

表1は生徒のミニ作文（手紙文は除く）に見られた誤用を種類別に集計したものである。表1からわ

かるように、理由の表現は誤用が特に多かったものの一つである。そして、生徒の誤用に多いのは「なぜならば～からだ」等の理由の文型にあてはめようとして失敗するケースであった。平易な単文であれば、この文型に当てはめて文を書くことはさほど難しいことではないと思われるが、長く複雑な文章になってくると、この文型にあてはめて書くことが難しくなる場合も少なくない。また、「なぜならば～からだ」のような理由の文型は、文法上は正しくても、その文章全体のバランスから考えると合わない場合もある。例えば、エッセイのような比較的柔らかい印象の文章でこの文型を使うと、そこだけ堅苦しい表現でバランスが悪くなる。これは学習指導要領にあった「目的や場に応じた言葉の適切さや美しさ」を考える上でも改善すべきところである。

以上のような事情を踏まえ、「理由の文型を敢えて使わない」で文を書くという選択肢も考えてはどうかというのが、本研究における提案である。

なお、生徒によっては平易な文であっても、次のような誤用が見られる場合もある。

僕は絵を描くことが好きです。なぜならば上手く描けると嬉しいからです。

この例の場合は、本来「嬉しいからです」となるべきだが、「嬉しい」という形容詞を「からです」につなげる際に、「好きだ」などの形容動詞と混同して誤用が起きている。このような生徒に対しては、形容詞と形容動詞の活用の違いについても根気よく指導していく必要があるが、同時に、このように間違いやすいケースがわかっている場合は、それを回避する方向で文を書くことも選択肢の一つとしてよいのではないかと考える。

4 指導上の留意点

上記のような考えの下、敢えて理由の文型を使わないという練習を授業で行った。その際の留意点として、その文型の正しい使い方は確認した上で、その文型を敢えて使わないという方法も考えさせると

いう手順を必ず踏むようにした。また、その前段階として、理由の表現に限らず、次の点を作文の際の注意事項とした。

ア．くどい表現は避ける。

イ．同じ表現を続けて使わない。

例えばアの場合、次のような例が考えられる。

例ア：彼は首になった。なぜならば彼の勤務態度が悪かったからだ。

この場合、二つ目の「彼の」は明らかなことなので、省く。また、「なぜならば」と「からだ」はどちらも理由の表現であり、前者は省くことが可能なので、理由をとりたてて強調する必要がない場合は省く。最終的には次のような形に直すことができる。

例ア'：彼は首になった。勤務態度が悪かったからだ。

なお、「なぜならば～からだ」の他にも、下記のように様々な形が考えられる。

彼は首になった。理由は彼の勤務態度だ。

彼は首になった。理由は彼の勤務態度にある。

彼は首になった。理由は彼の勤務態度が悪かったことだ。

彼は首になった。理由は彼の勤務態度が悪かったからだ。

彼は首になった。それは彼の勤務態度が悪かったからだ。

彼は首になった。原因は彼の勤務態度が悪かったことだ。※下線部を引いた部分は省略が可能次に、上記イの例を挙げる。

例イ：私は蕎麦が好きです。腰の強い蕎麦は噛み応えがあつてとてもおいしいです。また、新蕎麦は香りがあつてとてもおいしいです。

「とてもおいしいです」を重ねて使っているので、表現を変える。ここでは「風味があります」としたが、そうすると今度は「香りがあつて」と同じ「ある」という動詞を使うことになるので、「香りが良く」に直し、次のように書き換えた。

例イ'：私は蕎麦が好きです。腰の強い蕎麦は噛み応えがあつてとてもおいしいです。また、新蕎麦は香りが良く、風味があります。

以上のようなことを授業で確認し、その上で理由の表現を取って使わない練習を行った。その内容の一部と分析を以下に述べる。

5 分析

(1) 生徒の誤用例

まず、生徒のミニ作文から、理由の表現を使った文章で誤用を含むものをいくつか抜き出し、それをどのように直していくかを生徒達と一緒に考えた。以下に誤用例を挙げる。

例 1：私は「アニメ映画」を見る事が好きです。

特に 30 年前ぐらいの「アキラ」など、古いアニメ映画が好きです。理由は、「アニメ映画」はテレビアニメよりも、クオリティが高く細い部分もしっかり描かれていて、とても見ごたえがあるからです。もう一つ古い「アニメ映画」が好きな理由は現代のデジタルの映像よりもアナログの少しザラついた感じの映像が深みがあつて好きだからです。

例 2：好きなことはダンスをするのが好きです。

その理由は、日本人で有名な歌手が歌いながらダンスをしていて、それを見てマネして踊ってみたら、楽しいと感じていたから好きになりました。

例 3：私は、犬と一緒に遊ぶことが好きです。な

ぜならば、中学や高校の時に、部活で忙しく、遊べない時もあります。しかし、一緒に散歩したり、ボール遊びをすると、疲れが取り、癒されて、楽しいと思ったからです。

例 1～3 は「好きなこと」という題で生徒が書いた作文における理由の表現の誤用例である。どの場合も「なぜならば～からです」「理由は～ことです」という文型に当てはめようとして失敗している例である。これらの文型は理由の表現として必要な文型であり、その使い方を文法的に理解させることは当然必要である。しかし、高校生以上になると生徒もより長く複雑な文を書くようになり、この文型に当てはめることが逆に誤用を引き起こすケースも出てくる。筆者もこれらの誤用に関して文法的な間

違いを直し、正しい形にするという手続きは授業で行った。その上で、ここでは一歩進んで、それらの文型を取って使わないということも選択肢の一つとして考えてみたい。

例 1 は「理由は～からです」という文を二つ続けているので、上記 4 のイの留意点に反する。そのことを教員が指摘すると、「理由は」を「なぜならば」に直すべきという意見が出た。また、二つ目の文は「理由は～ことです」とすれば、文末表現の重複も避けられる。しかし、それでもまだ全体に堅苦しさがある。そこで、文法的にどう直せるかを確認した後、さらに一歩進んで、理由の文型を使わない場合について考えさせた。「理由は」や「なぜならば」がなくても「からです」で文末が終われば理由の表現としては十分成り立つし、理由の文型を取って使わなくても、文章の流れから理由の説明だとわかる場合も多い。例 1 の場合は話の流れから、古いアニメ映画が好きな理由を述べているのは明らかである。書いた本人も含めた生徒達の意見を合わせた結果、下線部を次のように直した。

例 1' : 「アニメ映画」はテレビアニメよりも、クオリティが高く細かい部分もしっかり描かれていて、とても見ごたえがあります。また、古い「アニメ映画」のアナログの少しザラついた感じの映像のほうが、現代のデジタルの映像よりも深みがあっていいと思います。

例 2 は「その理由は～から好きになりました」という組み合わせがおかしい。また、「その理由は」を受ける「から」までの間が長いことも文をわかりにくくしている。「その理由は～感じたことです」とすれば文法的には正しい文になるが、やはり堅苦しい。そこで、「その理由は」を取り払い、「感じていたから」を「感じて」と、助詞の「て」で自然につなげて次のように直すことができた。

例 2' : 日本人の有名な歌手が歌いながらダンスをしていて、それを見てマネして踊って見たら楽しいと感じて、好きになりました。

例 3 は二つの文にまたがってこの文型にあてはめようとして間違いを起こしている。これは二つの

文を一つにして、「なぜならば～からです」という理由の文型にあてはめて書くこともできるが、そうすると一文が長くなりすぎる。これも理由の文型を取り払い、次のように直すことで、解決する。

例 3' : 中学や高校の時に、部活で忙しく、遊べない時もありました。しかし、一緒に散歩したり、ボール遊びをすると、疲れが取れ、癒されて、楽しいと思いました。

このように、複雑な文の場合は特に、「理由を説明する時は理由の文型を使う」という考えを敢えて取り払うことで、書きやすくなり、また、文法的な間違いも減る場合がある。このような方法で生徒達の選択肢を増やすことも表現の多様性を引き出す手助けになるのではないかと考える。

(2) グループワーク

次に、理由の表現の練習を済ませた後で行ったグループワークの様子について報告する。教員が間違いを含んだ作文例を出し、それを生徒達が話し合っ直すという練習である。グループで行うことで他者の視点への気付きを促すことがねらいである。また、生徒同士で意見交換することで、特に聾学校の国語の授業で不足しがちな「話す」「聞く」技能を活用する場を作ることとねらいの一つであった。以下に誤用を含む作文と、生徒達の修正案を紹介する。

6月4日(水)

将来の夢(元の文:直す前)

私は、家の近くの本屋さんでアルバイトしています。学校が終わってから、毎日3時間、仕事をします。最初は、そんな仕事は無理じゃないかな、と思ったけど、やってみたら楽しかった。それに、自分が知らない本がすごくたくさんあるということもわかってよかったし、ここでアルバイトしてよかったと思うし、大学にも行こうと思った。理由は、ここで本のことをいろいろ知って、興味を持ったので、大学でもっと勉強して、将来は本の仕事をしたいと思うようになったからです。アルバイトをして、ちょっとだけ社会のこともわかったような気がします。これから、もっと勉

強して、自分の夢をかなえたいと思います。

(男子修正案)

私は、家の近くの本屋さんでアルバイトしています。学校が終わってから、毎日 3 時間に仕事をします。私は初めて仕事することが難しいと思ったけれど、楽しかったです。それに、知らない本がたくさんあることがわかりました。ここでアルバイトしてよかったので、大学に行きたいと思います。本のことをいろいろ知って、興味を持ったので、本の仕事をしたいと思うようになりました。これから、しっかり勉強して、自分の夢をかなえたいと思います。

(女子修正案)

私は、家の近くの書店でアルバイトしている。学校が終わったら、毎日 3 時間仕事をする。最初は、書店の仕事は私には無理ではないかと思ったが、働いてみたら楽しいと感じた。そして自分が知らない本がとてたくさんあるということがわかり、アルバイトをし、少しでも社会のことがわかってきた。そして大学に行きたいと思った。ここで本のことをいろいろ知り、興味を持ったので、大学でさらに勉強し、将来は本に関する仕事をするという夢をかなえたいと思う。

学期の始まりに初めて生徒達を書いた作文は、文末表現が敬体も常体も混ざり合っていたため、どちらかにそろえるように繰り返し指導した。その成果か、男女とも、文末表現の形式はそろえてあった。また、話し言葉も書き言葉に直してあり、重複する表現も他の表現に変えてあった。理由の表現も意識して直したことがわかる。ただ、女子のグループは細かい表現を吟味しすぎたためか、「将来は本に関する仕事をするという夢をかなえたい」ということが最後に唐突に出てきて、少々違和感がある。また、男子は「3 時間に」の「に」が不要であると女子から指摘を受けた。このように、まだ改善の余地はあ

るが、全体に授業で注意したことは概ね反映されており、また、グループでやることで他人の意見を聞き、自分の意見も伝え、その中で良い効果があった。なおこのグループワークは一学期に行ったものであるが、二学期に同様のグループワークを行ったときは一学期に比べると上達が見られた。

6 おわりに

今回は理由の表現について、敢えて文型の枠を取り払うことで一つの選択肢を増やし、表現の幅を広げる指導を試みたが、理由の表現以外でも同様の試みを行っている。小学部から培ってきた生徒達の知識をより生かせるよう、今後も様々な角度から表現の多様性を引き出せるよう、考えていきたい。

〔参考文献〕

- 谷口洋子 言葉の力を育てるために—小学部低学年における実践— 筑波大学附属聴覚特別支援学校紀要 第 35 巻 p17～22 2013 年 3 月
- 佐坂佳晃 言語発達に遅れが見られる児童に対する指導—小学部高学年 E 児への指導の実践から— 筑波大学附属聴覚特別支援学校紀要 第 36 巻 p26～29 2014 年 3 月
- 澤 隆史・勝又 直 聴覚障害児の作文における文の統語的・意味的特徴—聾学校児童と生徒の比較から— 東京学芸大学紀要 I 部門 52 p177～183 2001
- 澤 隆史 聴覚障害児の文産出における格助詞誤用と動詞の自他—「が」と「を」の混同を中心に— 東京学芸大学紀要 I 部門 52 p179～184 2000